

旅する絵本たち 一九二八・二九年

—東京・モスクワ・オデッサをつなぐ人々—

沼辺 信一



絵本「長い名前」1929年

「長い名前」の謎

それはいささか風変わりな一冊だった。一九二九年モスクワで刊行された絵本「長い名前」(Длинное имя) (A・レイフェルト、Я・メクシン文、A・モギレフスキー絵)は、昨年から巡回中の「幻のロシア絵本 一九二〇―三〇年代」展に並んだ二五〇冊なかでもひととき異彩を放っている。驚いたことに題材は日本の昔話。異国情緒たつぷりの挿絵がそれなりに魅力的だが、よく見ると門構えが鳥居になっているなど、何とも珍妙である。

実はロシアでは日本の古典文学の紹介が思いのほか早くから行われ、革命前の一九〇八年、巖谷小波の「日本昔噺」全二四篇(一九四九・九六年)がすでにペテルブルグで翻訳出版されているので、一九二〇年代のロシア絵本にこうした日本民話ものが含まれること自体は怪しむにあたらない。むしろ不思議なのは、桃太郎や猿蟹合戦のようなポピュラーな昔話(それらは小波の著作にも含まれていた)ではなく、われわれ日本人にとっても馴染みの薄い説話がわざわざ選ばれている事実である。

粗筋を紹介しておこう。「ちよん」という短い名の男の子が継母のもとで育てられる。やがて生まれた弟には、長寿を願って途方もなく長い名前がつけられる(原文とその音訳を示す)。

Дайнодо-Конюдо-Малпиранюдо-Хиронюдо-Сейкатонюдо-Харимонюдо-Хейтоко-Хейтоко-Хейтанюдо-Хеметаникомета-Ийопирика-Цюгиприка-Цюни-Цюни-Цюбицуни-Цютаробуцуни-Наюбицуни-Аюмому-Кономому-Аюмосу-Коомосу-Моосу-Моосумосикуно-Цванпицунохихидзо-Эйуке-сан
だにちようどう、にちようどう、まっぴらにちようどう、ひるにちようどう、せいかにちようどう、はりものべた、へいとこ、へいとこ、へいがのこ、へめたにこめた、いちようぎりか、ちようぎりか、ちようどう、ちようびつに、ちようたるびつに、なごびつに、あはやもぬ、このやもぬ、あももうす、こうもうす、もうす、もうすのうすの、ちやわんちやうすのひびじょうの、えいすけさん



長い名前をつけて大切に育てられた弟に対し、兄の「ちよん」は短い名ゆえ蔑まれ、さんざんこき使われた。ある日、兄は遊んでいて井戸に落ちてしまい、すんでのところを救われる。やがて今度は弟のほうに井戸に落ちるが、急を知らせる子供たちが「大変だ、だいにちようどう、こにちようどう、まっぴらにちようどう」と長々と説明しているうちに、長い名の子は溺れ死んでしまう。

この断の類話は、種々の日本昔話アンソロジーに「長い名前」「長い名の子供」として収録されている(手近な例では岩波少年文庫の稲田和子編「かもとりこんべえ」所収の「長い名の子」)。広く全国に流布した昔話らしく、短い名の兄が早死したので弟に長い名をつけるという筋や、弟が井戸でなく川で溺れ死ぬ結末のものも伝えられている。容易に察せられるとおり、物語の眼目は早口言葉あふの「長い名前」の面白さにあり、「とくとくりんぼう、そうりんぼう……」「いちちようぎり、にちようぎり……」など幾多のヴァリエーションが存在する。「じゅげむじゅげむ……」もその一つで、落語の「寿限無」はこの昔話から派生したものという。キリル文字で綴られた「大入道、小入道、まっぴら入道、ひろ入道……」は、富山県で採話されたものとよく似通っている。



レイフェルト
【東京朝日新聞】
1931年3月13日
村武雄「じゅげむ、じゅげむ、
ごくわうのすりきれ……」。もし
かしたら、来日時にレイフェルト
自身が北陸地方でじかに採話

絵本「長い名前」のテキストを著した二人のロシア人、レイフェルトとメクシンはどんな人物だったのだろうか。まずヤコフ・メクシン Яков Петрович Мексин (一八八六―一九四三)は長くモスクワ児童書博物館館長と国立出版所児童部主任を務め、二〇年代後半にはロシア絵本の常連執筆者の一人だった。一方のアンドレイ・レイフェルト Андрей Алексеевич Лейферт (一八九八―一九三七)は今では忘れられた存在だが、ウラジオストクで日本語を学んだのち、二度にわたり来日(一九二五―二七、二八―三三年)、日本文学・演劇研究のかたわら漫画家としても活躍したユニークな才人である(秋田雨雀、柳瀬正夢らと親交があった)。帰国後の三五年に労作「現代日本語常用漢字辞典」を著すが、当時の日本研究者の例に洩れずスターリンの粛清の犠牲となった(松山真一氏による先駆的研究がある)。「長い名前」については、まず日本通のレイフェルトが下訳を用意し、それに専門家としてメクシンが筆を加えたものと推察されよう。

さてここから先が難問である。レイフェルトは日本で刊行された民話集の類に依拠したと思われるのだが、その特定は容易でない。試みに戦前の代表的なアンソロジーにいくつか当たってみたが、みつかるのは同じ断の別ヴァージョンばかりで、肝心の「長い名前」が合致しないのである(楠山正雄「ちようどう、ちよう

したという可能性も捨てきれない（彼は入国・出国時に教習を通
過しているのである）。

「幻のロシア絵本」展でこの絵本を見られた東京の村上久子
さんから、興味深い情報が寄せられた。八一歳になるご母堂が幼
い頃読んだ「長い名前」を今なお語っておられ、その「大入道」、
小入道、まっぴら入道、ひら入道……がロシア絵本と細部までほ
ぼ合致する、というのである。やはり、元になった日本語の本が
存在するのは確実らしい。そもそもレイフェルトは「大入道」を
「だいにゆうどう」と誤読しており、これは準拠した書物が漢字
かな混じりだったことを示唆している。

モスクワでの「日本児童書展」

「長い名前」刊行の前年にあたる一九二八年、モスクワは時な
らぬ日本ブームで沸きだっていた。同年八月、市川左團次率いる
歌舞伎一座がモスクワの対外文化連絡協会（BOKC）の招きで
初の海外興行を行い、芝居好きのモスクワっ子を熱狂させた（セ
ルゲイ・エイゼンシュテインの傾倒ぶりはつとに知られている）。
舞台の興奮も冷めやらぬ一〇月、今度は同じBOKC主催による
「日本児童書・児童作品展」なる催しが始まろうとしていた（モ
スクワ歴史博物館、一〇月一日〜二日）。出品点数が半端で
ない。児童書一四五〇点、児童の絵画六百点という空前の規模
である。そしてこのとき展示を企画・構成したのがヤコフ・メク
シン、すなわち「長い名前」の執筆者の一人だったのである。

長く忘却の淵に沈んでいたこの展覧会について知ることができ
たのは、東京のソ連大使館で通訳官を務めた日本学者エヴゲニー



東京・小石川の藤沢衛彦邸でコレクションを見る
トロヤノフスキー大使（左）とスパリヴィン（右）
（スパリヴィンの奥に藤沢衛彦／1928年5月7日）
「読売新聞」1928年5月8日

業である児童書や児童作
品の収集は、スパリヴィ
ンが中心となって東京の
ソ連大使館で進められ
た。新聞報道によれば、
日露協会と日本児童協会
の後援のもと、丸善、富
山房、アルス、博文館な
どの出版社がこぞって協
力し、「これらの寄贈図
書雑誌には、一々露文で
内容の梗概、性質などの

説明書が添付される」（「読売新聞」五月一六日）。注目すべきは、
日本児童協会会員の民衆文化研究家で、「児童書籍三百冊及び三
百年前から明治初年に至る児童浮世絵三百点を所蔵する」藤沢衛
彦が貴重なコレクションの出品を快諾したことである（同紙五月
八日）。これによって、モスクワの「日本児童書展」は同時代文
化の紹介にとどまらず、歴史的な興行きをも備えた内容となった。
こうして集められた図書・資料はソ連大使館で関係者の内覧に供
したあと、すでに収集されていた日本児童の絵画作品（その一部
は一九二七年一〇月に大使館で展示済み）とともにおそらく六月
末頃モスクワへ発送された。

一〇月一日から二日までモスクワ歴史博物館で催された展
覧会の模様については、BOKC発行の英字週報「YOKS」 Weekly
News Bulletin の一九二八年二月二日号（五〇・五一合併号）



スパリヴィン「横眼で見た日本」

・スパリヴィン Евремит
Терпиховъ Чарльин
（一八七二〜一九三三）
の日本語の著作「横眼で
見た日本」（スパリヴィン
著、新潮社、一九三一年）
における次の一節からで
ある。「モスクワで行わ

れた」色々々催しの内で一番面白いものは、日本児童書籍展覧会
でした。「中略」見物人には色々々な人がありました。例へば美術家、
博物館係員、大中小学生の先生及び学生、活版屋、医者、労働者、
小使、其他ロシアの子供も非常に多かつたさうです。「中略」この
展覧会がロシアの子供に与へた刺激は非常なものです」（四六〇
〜四六二頁）。スパリヴィンはBOKCの在日本代表を兼任して
おり、自らも携わった日ソ文化交流の一例として展覧会に言及した
のである。忘れずに付け加えておくと、本書「横眼で見た日本」
は知日ロシア人による日本文化論として無類に楽しい読物であ
り、その奇抜な装丁とユーモラスな挿絵を手がけたのは「長い名
前」のもう一人の執筆者であるレイフェルトその人なのである。

ところでこの「日本児童書展」（以下このように略記）は二か
月前に行われた歌舞伎興行と対の企画として発案され、前年秋の
革命十周年記念祭典に招待された小山内薫とBOKCとの間で最
初の構想が練られたらしい。同時期に訪ソした秋田雨雀の日記に
は、モスクワでBOKCの担当者からこの二つの企てについて相
談される一節がある（一九二八年四月一三日）^③。実際の準備作



モスクワの「日本児童書展」会場風景「YOKS」Weekly News Bulletin 1928年12月22日号

が写真入りで報じている。記事によれば、限られた会期ながら観
覧者は四千人を超え、子供たちのほか画家、教育関係者、印刷関
係者らが足を運んだという。同誌の掲載写真は物珍しさからか、
書籍以外の出品物、すなわち人形や玩具、木版刷りの「おもちゃ
絵」（前述した藤沢衛彦の所蔵品）ばかり写しているが、背後に
はわずかながら書籍の陳列も姿を覗かせ、「ロシア作家」「ロシア
の民話と伝説」などキリル文字の
表示も読み取れる（トルストイ童
話など、日本で刊行されたロシア
もののコーナー）。BOKCはこの
ほか展覧会の概要を記した小冊子
も刊行しており、企画者のメクシ
ンとサクリナ女史（後者は児童画
部門の担当）がそれぞれ周到な紹
介と解析を行っている。ほどなく
二人の文章は日本児童協会の月刊
誌「童話研究」（八巻一号、一九
二九年一月）に収載されているの
で、そこからメクシンの所論の一
端を紹介しよう。

彼はこの展覧会の準備に八か月
を費やしたこと、東京のスパリヴィ
ン博士の「エネルギー」と知己の
多いことと博学」、さらには日本
児童協会（巖谷小波と藤沢衛彦の

名が言及される」と出版各社の尽力に感謝したあと、「最初は主に児童を展覧するつもりであつたが、教科書や教育学的勞作物や楽譜や版画を始めとして、きり紙や折り紙や児童の芸術的作品など」を幅広く集めることができた」と述べる。一四五〇点を数える出品書籍の内訳は次のとおり。

絵本と絵画的玩具	四二〇種
物語、昔話、小説	一五七種
歴史物語	五二種
児童劇、児童遊戯	一三種
児童科学	三六種
児童の雑誌と新聞	二五二種
楽譜	一九三種
教科書	二七八種
教師用教科書及参考書	四九種

続いてメクシンは分野ごとの的確な分析を加え、例えば「物語、昔話、小説」ではトルストイやクルイロフ、ドミトリエフ、ヘムニツェルの作品がすでに邦訳されていることに「我々の予期しなかつた悦び」を表明する。「教科書」については、ソ連に比べ日本が芸術的に優れていることを認め、「立派な挿絵に依つて、日本の遺産であり誇りである版画芸術に対する趣味を児童に注ぎ込まう」としてある実例」と称賛している。ちなみに、出品物の大半は展覧会委員部に寄贈され、モスクワに保存される予定だという。

オデッサからの報告

モスクワでの「日本児童書展」開催を、思いもよらぬ遠隔地か

ら注視する一人の日本人がいた。ウクライナ南部、オデッサの日本領事館に勤務する領事、島田滋（一八八五—一九五四）である。前年にノヴォシビルスクから黒海に臨むこの港町に転任した彼は、持ち前の几帳面さを發揮して、地元紙に隈なく目を光らせてつ本国への報告を頻繁に送っていた。外務省の外交史料館に今も残るそれらの公記録は、「日本児童書展」のその後について、またとない貴重な情報を提供してくる⁽⁴⁾。

一九二八年一月二九日、島田は外務大臣宛ての報告で、オデッサの地も左団次の歌舞伎の噂でもちきりであるとして述べたあと、地元共産党機関紙に小さく載ったモスクワの「日本児童書展」の記事を添付し、「近來本邦二対スル一般興味ノ著シク増進シツ、アルハ事実ナリ」と記す。もともと、彼はこの傾向を手放しで歓迎してはいない。文化紹介の名を借りて、日本に対する曲解や悪意ある宣伝がなされはしないかと憂慮していたのである。

モスクワでの「日本児童書展」を成功裏に終えたBOKCは、ちょうどこの頃、同展のウクライナ巡回を検討していたと思われる。暮も押し詰まった二月一日、オデッサの島田領事宛てにハリコフ市の全ウクライナ対外文化連絡協会から電報が届く。翌一六日、「日本児童書展」の開会式を行うのでぜひ列席してほしいという要請だった。当時ウクライナにおける日本の在外公館はオデッサのみだったので、島田宛ての招待状が送られたのである。とはいえ、オデッサからハリコフまでは列車で一昼夜かかり、出席はどうみても不可能だ。展覧会の内容に「幾分小官ニハ不安ノ点アリ」、機会があれば会期中ぜひ訪れてみたいのだが、と島田は希望を漏らす（二月一八日付）。

年が明けて翌一九二九年二月一日付の報告で、島田は「日本児童書展」がウクライナの首都キエフで近く開催される手筈だと記す。しかも、同展のオデッサへの巡回もすでに決定済みなのだという。地元の外交委員から出品目録を見せられた彼は、予想以上の充実した内容に驚き、「目録ヲ一覽スルニ頗ル面白キモノアリ、恐ラク市民ノ大歡迎ヲ受ケルナラン」「本邦事情ノ紹介ノ一方法トシテハ大ニ歡迎スベキモノナリト信ズ」。これを期に、島田の「日本児童書展」への態度がにわかに好意的なものに転じていく。

二月二七日キエフで開幕した展覧会に、島田はさっそく人を遣わす。同市在住の三谷留學生（外務省派遣）に会場の様子を報告させたのである。三谷によれば、展覧会は主催者の予想を上回る盛況ぶりであり、すでに会期を二日間延長することが決まったという。当時キエフに住む日本人はこの留學生ただ一人だったらしく、「展覧会へ赴キタル際ハ諸方ヨリ引張り風ニテ説明ヲ求メラレ開口シタル趣ナリ」（三月二〇日付）。子供たちに囲まれて質問攻めにあう三谷青年の姿が目につくようである。

そして七月一日、「日本児童書展」はいよいよオデッサに到達する。会場の「トルストイ絵画館」の狭さゆえ、出品規模はモスクワ開催時よりも縮小せざるを得なかったが、それでも優に五室を占める堂々たる展示だった。開会式に來賓として招かれた島田領事はここで初めて企画者のメクシンと出会い、熱心に列片解説するその姿に感銘を受けている。「小官亦一場ノ挨拶ヲ為シタルガ初日ノ印象ニテハ本件日本展覧会ハ頗ル市民ノ歡迎ヲ受ケ居ルモノノ如ク、其ノ實際ハ向後二週間ノ開會期間ノ状況ニヨリテ明カトナルベシ」（七月一八日付）。島田はこの日の報告に、展覧

会開幕を告げる種々の新聞記事とともに、BOKC刊行の展覧会小冊子（前述）をまるごと添付している。

島田の「日本児童書展」に関する一連の記録は、八月二日終了したオデッサ展を総括する報告で締めくくられる。彼はウクライナのBOKC担当者の言を引用して、夏休み期間中にもかかわらず、一日平均四百数十人の観覧者があつたのは大成功だとする（これはモスクワでの一日の観覧者数と大差ない）。さらに彼は、さりげなくこう記す。「本件二付当館トシテハ小官始メ館員ニ於テ出来ル丈ケ展覧会ニ出席シ種々説明ヲ加ヘ便宜ヲ与フル所アリ」。つまり、領事以下館員が時間を割いて会場まで出向き、ギヤラリトークを行ったというのである。そしてこのことは「日露両互ノ了解、親善ニ資スル所尠ナラザリシト信ズ」（八月三日付）。

*

在オデッサ領事島田滋の報告を追いながら、「日本児童書展」がモスクワからハリコフ、キエフ、そしてオデッサへと巡回するまでを跡づけてみた。展覧会に対する島田の反応が当初の疑心暗鬼から変化していき、遂には「日露両国の親善に資するところが少なくない」と信ずる「へと辿りつくさまが何とも感動的である。

島田は外交官として日露関係の修羅場を何度もくぐってきた経歴をもつ。シベリア出兵時の一九二〇年、「尼港事件」で多くの日本人が殺害され、ニコラエフスク副領事の石田虎松が自決したその年に、彼はウラジオストク総領事館の副領事だった。日ソ国交樹立に先駆けての困難な外交交渉の現場も体験した（一九二一年七月のハルビン予備会談⁽⁵⁾）。だからこそ、オデッサで彼が記す「日露親善」の語には千金の重みを感じられるのである。

思い返せば、一九二五年に日ソの国交が樹立されて以後も、日本政府はソ連との文化交流にひどく冷淡だった。二七年の「新ロシア美術展」(東京、大阪、名古屋)、二八年の左団次の歌舞伎興行、そして「日本児童書展」と、ВОСКが関わった交流事業における日本側のパートナーはすべて民間の企業・団体・個人であった。社会主義思想の流入を恐れる日本政府は、それらの企てと一切関わりをもとうとしなかった。オデッサの展覧会場で、日本の外交官がささやかな形ではあれ、文化交流の一端を担っていたこの意味は決して小さくない。

ようやく解けた謎

「日本児童書展」の開催に尽力した功労者として、ВОСКの刊行物はスパリヴィンとともに藤沢衛彦(一八八五―一九六七)の名を挙げている。自ら収集してきた江戸期・明治初年の稀少な児童文化資料(版本やおもちゃ絵など)を惜しげもなく貸し出したのだから、ロシア側の関係者が藤沢に格別の敬意を表するのは当然であろう。これによって、出品物全体を歴史的なパースペクティブのもとに一望できたことは間違いない。

民俗学、伝承文化研究における藤沢の業績は、同時代の柳田国男のそれに比べて不当に軽視されており、いまやすっかり過去のの人となった感もあるが、生前の彼は日本伝説学会・日本風俗史研究会を創設し、日本童話協会・童話作家協会・アンダーゼン研究会の設立や育成に関わるなど、大正期から戦後にかけて多方面にわたって活躍した傑物である。彼は明治大学教授の肩書をもつたわら、見世物や大道芸、流行歌など「卑俗な」大衆文化にも深

く傾倒した好事家でもあった。百数十点にも及ぶ藤沢の著作のなかに、童話集や児童文学研究が含まれていることは知っていたが、あまりにも膨大すぎてこれまで何となく敬遠してきた。つい先日、藤沢が大正期に再話した民話集『滑稽童話集(純日本童話集第一集)』(国民書院、一九二一年)と出くわし、その頁を繰って思わず息を呑んだ。収録されている冒頭の一篇「ちよんきりのちよんさん」がロシア絵本「長い名前」と瓜二つなのだ。物語の細部がほとんど一致するうえ、何より肝心の「長い名前」が(完全にではないとはいえ、ほぼ)同一なのである。

大入道小入道、まつびら入道ひら入道、背高入道播磨の別当、へいとこへいとこへいの子、へめたにかめた、一丁ざりか丁ざりか、ちよちよらのちよざりか二丁ざりか、丁に丁にちやうらくに、ちやう太郎びつにちやうびつに、あの山のこの山の、あ、申すかう申す、申す申すの申し子の、しきしきあんのへいあんじ、てんもくもくのもくぞう坊、茶碗茶臼の秘々蔵の栄助。

両者を読み合わせてみると、レイフェルトIIメクシン版では中段の「ちよちよらのちよざりか二丁ざりか」と後段の「しきしきあんのへいあんじ、てんもくもくのもくぞう坊」がまるきり欠落しており、ほかに細かい相違もあるのだが、まずはこの藤沢衛彦版こそがロシア絵本の典拠と考えてよさそうである。おそらくモスクワでの編集時に、あまりにも長すぎる名前を刈り込んでいくうちに、いくつかの異同が生じたのではなからうか。

一九二九年のロシア絵本「長い名前」は、明らかに前年モスク

ワからスタートした「日本児童書展」の直接の副産物である。絵本の出典として選ばれた民話集の著者は、展覧会の功労者の一人であり、筆者メクシンは展覧会を企画した張本人である。さらに、挿絵を手がけたアレクサンドル・モギレフスキー・Александр Иванович Могилевский(一八八五―一九八〇)は、すでに触れたВОСК刊行の展覧会小冊子に日本玩具などのカットを描いた画家だった。レイフェルトは一九二八年九月(モスクワ展開催の一月前)という微妙な時期に来日してしまっているの、展覧会そのものは観ていない(準備段階で手伝った可能性はある)。レイフェルトがいつどこで藤沢の民話集を手にし、その一篇を翻訳したかについては不明だが、おそらくは東京のソ連大使館(彼はここで海軍武官通訳としてしばらく勤務した)でスパリヴィンに勧められて、と想像しておこう。

エピソード——一九三三年、東京

モスクワでの展覧会から五年近い歳月が流れた一九三三年春、東京にヤコフ・メクシンが姿を現す。三月から始まった「万国婦人子供博覧会」ソ連館の陳列に立ち会い、その開館式に出席するための来日だった。もちろん彼が日本の地を踏むのは初めてである。モスクワからは貨車二台分の展示品が持ち込まれ、ソ連が誇りとする清新な児童文化・女性文化をアピールしようという意気込みなのである(教育学者アシナ・クラフチェンコも同行)。

上野と芝浦を会場に開かれたこの博覧会は、初の本格的な猛獣サーカスとしてドイツからハーゲンベック・サーカス団が来日したこと(これを題材に恩地孝四郎、川西英らが版画を制作してい



童心の語り手
メクシン

る)と、日本初のテレビジョン実験が公開されたこともあつた。そのなかにあつて、ソ連館の展示は内容的にも陳列法においても断然優れており、新聞雑誌でも好意的に取り上げられている(若き日の野崎韶夫が展示助手を務めた)。

メクシンは展示作業や公式行事の忙しい日程をこなしながら、東京と京都で講演を行ったほか、新聞社訪問や雑誌取材、学校やセツルメントの見学など、実に精力的に歩き回っている。いよいよ帰国間近の五月一日、彼は念願だった巖谷小波への表敬訪問を果たす。ときに小波六三歳、世を去るわずら四か月前である。

大竹博吉の案内でクラフチェンコとともに巖谷邸を訪れたメクシンは、武井武雄邸で玩具(自作のイルフ・トイスのことだろう)を見ていて遅刻してしまったと詫言たあと、「イワヤサンの名はわが国でも革命前から知られている」「ぜひともお会いしたかった」と述べる。彼はもちろん本心からそう言ったのだが、小波はこれを単なる社交辞令としが受け取らない。そのあと、大竹の通訳で一問一答が始まるが、やがて小波がドイツ語を解することがわかると、ようやく会話はうちとけていく。

いつしか話題は子供への童話の語り聞かせへと移っていった。

——イワヤサンが子供に話すとき、どんな気分で話しますか。
——説明を避けて叙述を主とし、それをもつぱら子供の気持ちと、
こちらの気持ちが合致するように心がけます。

今度は小波が質問する番である。

——メクシンさんも常時お話をなさいますか。

——ハイ、ときどきは。実は日本のお話もするんですよ。

——それはいったい何ですか。

——するとささず、メクシンはこう答えたのだった。

——あの「長い名前」のお話です。

註

- (1) 民話「長い名前／長い名の子」の地域ごとの異版については、関敬吾「日本昔話大成 第一〇巻、角川書店、一九八〇年、一八六―一九四頁に詳しい。
- (2) 「来日ロシア人研究会」第二二回（一九九七年一〇月一日）での松山真一氏の発表「日本学者アンドレイ・鈴平留人のこと」。このとき資料配布された年譜を参照させていただいた。
- (3) 「秋田雨雀日記」第二巻、未来社、一九六五年、一一九―一二〇頁。このとき相談を持ちかけたのはBOCCの日本担当ノヴォミルスキー。
- (4) 以下に引用する島田滋の外務大臣宛て報告は、すべて外交史料館記録「1-6-4-010、および1-6-4-016」に含まれる。
- (5) 島田滋については不明な点が多いが、わずかながら以下の書物が有益な情報を提供してくれる。「高知県人名事典 新版」高知新聞社、一九九九年、三七六頁。ポダルコ ピョートル「モロゾフ家とその日本人の知人との交遊をめぐる」『遙かなり、わが故郷 異郷に生きるⅢ』成文社、二〇〇

五年、八一―九〇頁。西春彦（監修）『日本外交史 一五』鹿島研究所出版会、一九七〇年、二八―二九頁。

(6) 原文は総ルビ。藤沢衛彦は埼玉の出身だが、この「長い名前」の箇所については、武生（福井県）の友人から聞き書きしたものだという。

(7) レイフェルトとメクシンが合作した日本ものの絵本には、このほか「阿呆者の国 Спрана ныакож」三頭の子牛 Три телятj の二冊（ともに一九二九年）が存在するというが、いずれも未見。これらの出典がわかれば、絵本成立の経緯について、さらに推察が深まることであろう。

なお藤沢衛彦の採話した「ちよんきりのちよんさん」はほとんど流用に近い形で、翌一九三二年刊の楠山正雄「日本童話宝玉集 下巻」（富士房）にも「長い名」として収められており、長い名前そのものもほぼ同一である。したがって、レイフェルトが依拠したのはこちらのテキストである可能性も高い。その後さまざまに版を重ねた楠山の「日本童話宝玉集」にもこの「長い名」は再録されたが、名前はなぜか別形「ちようにん、ちようにん、ちようじゅうらう……」に改められている。

(8) このとき交わされたメクシンと小波の会話については、巖谷小波「ソ国の珍客」『東京朝日新聞』一九三三年五月五―七日を参照。ただし、引用にあたってはわずかに言い回しを改めた。

（ぬまべ・しんいち 二〇世紀芸術史）

本稿執筆にあたっては、村上久子さん、濱本真美さん、本誌編集部のご助力を賜り、また清水恵さんの日露交流史に関する論考からも多くの示唆を得ました。昨秋惜しくも他界された清水恵さんに、謹んで本稿を捧げます。